

# 目次

はじめに 山田馨

## I \* 詩の誕生

1

初めて書いた詩（一九四二・一九四八）——「模型飛行機」「青蛙」

五年生のときの詩

模型飛行機づくりという原体験

武蔵野の自然

読者を意識しはじめた詩

詩がうまくなる

003

2

一〇代の詩（一九四九—一九五二）——二冊の大学ノート

思春期の日々

ノートの運命

模型飛行機みたいな詩

処女詩集の誕生

文壇への登場

039

042

046

050

054

## II \* 青春の詩

3

『二十億光年の孤独』（一九五二）——「二十億光年の孤独」「かなしみ」「はる」

ユーモアのセンス

他者がいない世界

ことばが勝手につながる

思春期のダークサイド

遠い波の音

できちゃった詩

賢治の影響

神さまの居場所

060

065

070

072

075

079

082

087

4

『六十二のソネット』（一九五三）——「49」「62」

お筆先とソネット

コスモスからあらわれた恋人

詩を感じた原体験

「世界が私を愛してくれる」という感覚

私がいなくなる

家出

結婚

私性と時代性

091

095

100

102

104

109

112

113

### Ⅲ\* 人々と 生活の発見

『愛について』(一九五五)——「愛について(私はみつめられる私)」	5
女性から他者を発見する	118
愛による世界の見取り図	120
読者とつながりたい	123
自分の愛を疑う	126
微妙なとき	132
二つの愛	134

#### 6 『絵本』(一九五六)——「家族」

理想の家族像	137
家族という根拠地	143
自費出版	146
離婚、そして再婚	151

#### 7 『あなたに』(一九六〇)——「頼み」

私の嫌いな谷川俊太郎の詩	154
荒波	161

#### 8

『落首九十九』(一九六四)——「除名」「あいさつ」	8
初めての仕事は請けてみる	166
ことばを並べるだけで詩になっちゃう	172
豊富な物欲	175
時代のことば	177

#### 9

『21』(一九六二)——「ボエムアイ」	9
現代詩人としての登場	182
解釈ごっこ	186
衰弱した書き方	193

#### 10 『旅』(一九六八)——「鳥羽 1」「鳥羽 3」

転換点の詩	195
意識の下へ	202
幸せな家族	204
六五年という時代	208
老婆との出会い	212
現代思想の最前線	216
草木の名前	219

### Ⅳ\* 現代詩の 前線へ

11

『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』(一九七五)

——「夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった」4 谷川知子に

二つのスタイル……

朗読の影響……

複数の声……

231 225 222

12

『定義』(一九七五)——「りんごへの固執」「私の家への道順の推敲」

大まじめの笑い……

ホントではない詩人……

238 234

13

『コカコーラ・レッスン』(一九八〇)——「コカコーラ・レッスン」

「海」と「ぼく」……

生きることとことばの関係……

247 244

14

『対詩』(一九八三)——「母を売りに」

理性ではとらえられない人……

誠実な生活……

対詩と連詩……

257 255 250

15

『日本語のカタログ』(一九八四)——「日本語のカタログ 661と800」

創作でなくても詩……

ひらがなの詩へ……

268 262

V\* にほんごの源へ

——ひらがな詩の冒険

16

『ことばあそびうた』(一九七三)——「のはな」「かっぱ」「いるか」

ひらがなだけの詩……

ひらがな表記と音韻の問題……

日本語の負の側面……

詩と課題意識……

「かっぱ」の強み……

DIYの詩……

ヘンテコな世界……

凝って凝ってつくった……

大衆がつくる詩……

298 296

17

『マザー・グースのうた』(一九七五〜一九七七)の翻訳——「フェルゼンせい」

翻訳のはじまり……

堀内誠一さんの力……

マザー・グースから日本のわらべうたへ……

306 302 300





VIII  
\* いのちの  
草むら歩き

『minimal』(二〇〇二)——「小憩」「拒む」「座る」「泥」「うらた」 沈黙に近いものを……	29
エコ詩の可能性……	498
蘇州の古寺で……	499
九・一一ニューヨーク国際貿易センタービル ありのままのありがたみ……	503
老人と幼児……	507
極上の恋歌……	512
『夜のミッキー・マウス』(二〇〇三) ——「夜のミッキー・マウス」「なんでもおまんこ」「無口」	30
表題詩の位置……	518
真実の鼠……	521
性を越えた「おまんこ」の詩……	523
世界全体と一つになる……	528
自画像の変化……	529
詩の選別と等級……	533
詩の文体……	536
身体術への目覚め……	539
シンプルライフ……	542
呼吸法と詩……	545
『シャガールと木の葉』(二〇〇五)——「シャガールと木の葉」「百歳になって」「はな」 物語的な要素……	31
対語の発見……	555
死とユーモア……	559
老いの創造性……	563
時空がほどける……	567
現実の世界を超えて……	570
『すず』(二〇〇六) ——「きらびやかな」「おばあちゃんとおまんこ」「こはがつまずくとおまんこ」「はこ」「ぼん」	32
『はだか』の反響……	573
子どもと死……	576
子どものための言語論……	580
ベートーベンのとモーツァルト的な詩作……	584
ネガティブ・ケイパビリティ……	590

	35
『子どもたちの遺言』(二〇〇九)——「ありがとう」「うまれたよ ぼく」	
コンセプトの逆転……………	679
表情の力……………	683
宗教の境地……………	685
いのちの表情……………	689
子どもの目と大人の目……………	694
瞬間芸から物語へ……………	647
臨死をルポルターージュする……………	650
死出の旅の風景……………	653
無性にわびたい……………	658
映画の手法……………	660
気になる表現……………	665
「人っ子ひとりいない場所を自分の心の中につくる」……………	666
書きはじめないとわからない……………	669
魂の次元を生きる人……………	672
ラストシーンの力……………	675

	33
『私』(二〇〇七)	
——「自我介绍」「私」に会いた」「さようなら」「母に会う」「あのひと」「泣いているきみ」	
事実というフィクション……………	596
語りかける詩……………	602
二つの「私」……………	604
波動と粒子……………	608
臓器との対話……………	611
老母と幼女……………	617
二つの詩の世界……………	621
音楽を聴きながら書いた詩……………	624
詩があつかうべきもの……………	626
詩の純情……………	631
	34
『トロムソコラージュ』(二〇〇九)——「トロムソコラージュ」「臨死船」「この織物」	
二つの新しい特徴……………	635
長編詩のきっかけ……………	636
六種類の物語性……………	639
コロキアルな詩……………	641
英語で書かれたオチ……………	645

本書は、以下の八回にわたって、練馬の割烹居酒屋「にわの」で行われた対談に手を入れたものである。

- I \* 詩の誕生……………二〇〇七年一月七日(火)
- II \* 青春の詩……………二〇〇七年二月十九日(水)
- III \* 人々と生活の発見……………二〇〇八年四月二日(水)
- IV \* 現代詩の前線へ……………二〇〇八年六月一日(水)
- V \* にほんごの源へ——ひらがな詩の冒険……………二〇〇八年七月二十九日(火)
- VI \* 生きることの深み……………二〇〇八年十一月二日(金)
- VII \* 沈黙から……………二〇〇九年一月二八日(水)
- VIII \* いのちの草むらを歩く……………二〇〇九年四月一五日(水)